

# 再び「平和なアジア」へ

田畑光永

『軍縮問題資料』編集委員長  
神奈川大学教授



TBS北京支局長を経て「報道特集」「ニュースコープ」のキャスターを務め、現在復刻された『軍縮問題資料』の編集委員長に就いた田畑光永さん。その経験に立ち、日中関係のつき合い方を解きほぐす。

の時、もう戦争は二度とやらないと皆が心に誓ったのは事実だと思えます。軍備を持たず、戦争を永遠に放棄するという憲法を日本国民は自然に受け入れたのではないのでしょうか。

それが結果的に、日本の戦後復興と経済発展に大いにプラスになりました。気がついてみれば日本は経済大国になっていたわけですね。

戦後の世界は米ソ両大国の東西冷戦が長く続きましたし、さまざまな局地紛争も起こりました。その間、日本はアメリカの核の傘に守られて、国際政治に対してはほとんど発言してきませんでした。経済大国ではあっても、政治大国ではありませんでした。しかし、日本人の多くはその地位に満足していたのではないのでしょうか。政治的に発言することがなくとも、日本のテレビや車は世界中で販売され、歓迎されている。立派に経済大国としてやっていける。そういう状態が80年代半ばまで続いていました。

ところが80年代末にバブルが崩壊し、非常に長い不況に日本は陥り、経済大国の看板も色褪せてきました。マイナス成長やゼロ成長が続き、すっかり経済大国としての自信を失いました。数字を見れば、一人あたりのGDPは3万6000ドルほどあって、立派に経済大国なのですが、経済大国としてのプライドを失ってしまったのです。現在はその喪失感を埋め合わせようとして、今度は政治大国としての地位を追い求めているのではないかと感じられます。

## 軍備ってなんだ？

一口に「軍縮」といっても、状況によっては容易に軍備を縮小できない場合もあるでしょう。しかし、今の日本に関して言うならば、いったいどうして今のような軍備が必要なのでしょう。

もっとも初歩的な軍縮反対論に、皆さんもご存知の「戸締り論」があります。どの家だって戸締りをしているではないか、家に鍵をかけるように国には軍備が必要だ。戸締りもしないで安心できるか、という議論ですが、これは根本的に誤った議論です。「戸締り論」が有効な状況とは、どこに誰がいるかわからない環境が前提です。ところが、日本の周囲の国はどれも顔見知りばかりでしょう。地球上に200近い国があるといっても、日本を軍事的に攻める能力のある国はせいぜい四つか五つで、一番その能力のある国はアメリカでしょうが、それにロシア、北朝鮮、韓国、中国ぐらいのもので、こちらが相手に悪意を持たなければ、相手も日本に悪意を持つ必要はありません。国と国との間ですから、様々な矛盾が起きることはありえるでしょうが、しかし武力を使って解決しなければならぬような矛盾が起きると思えません。

そう考えれば、周囲の国々と仲良く、周囲の国々からもあの国は友好的な国だと思われるようにして付き合っていけば、何も今のようない軍備など必要ありません。日本の軍縮はそういう立場から考えれば、

## 靖国ブラックホール

小泉首相が繰り返している靖国神社参拝の問題にしても、靖国神社が戦後日本にとってどういう意味を持つ存在なのかを考えてみる必要があるでしょう。

過去に日本が行なった戦争をどう総括するのか、これは戦争に負けた時に日本人が取り組むべきテーマでした。しかし、靖国神社と東京裁判がそれをブラックホールのように飲み込んでしまいました。東京裁判が連合国の論理で戦争犯罪人を裁いたことで、本来ならば日本人自身の手で戦争の責任者を裁かなければならなかったのに、それが行なわれなかった。さらに東京裁判とは別に行なわれたBC級裁判でも多くの戦犯が裁かれ、千人近くが連合国の手によって処刑されました。確かにこれらの裁判で裁かれた人の中には無実の人も多くいたでしょう。しか

えればいいと思うのです。

そうは言っても、南北朝鮮も中国も軍備を持っている。とくに中国は年々軍備を増強しているのではないかと危機感をおもいますが、これらの国々と日本は歴史的背景が違います。これらの国々はかつて植民地支配や侵略を受けました。彼らが国を守る力を強めようとするのをやめるとは言えません。植民地支配や侵略をしたのはほかならぬ日本なので、日本はみずから平和に徹して、軍備が無駄であることを彼らにわかってもらうようにするべきです。ところが、日本の軍事力は実際にはアジアで一番強力なものです。そして今、改憲論議が花盛りです。自衛隊を「自衛軍」として、正式に軍隊として認知しようというのが自民党の改憲草案です。いったい何のために、そんなことをするのでしょうか。小泉首相だって口を開けば、日本は戦後60年一度も戦争をしないでやって来たというではありませんか。それは平和憲法に支えられてきたからでしょう。それをなぜ変えるのでしょうか。しかも最近では、やたらと周囲の国々に対してつつばる風潮が目立ちます。

## 八つ当たり国家主義

1945年、日本は戦争に負けました。ただ負けたのではなく、他国に大変な被害を与えた上で、結果として自分も大きな被害を受けて、降伏したわけですから、

し、そこばかりが言われますが、一方には実際に戦争犯罪に荷担した戦犯も存在しているわけです。決して無実の人間だけではない。ましてA級戦犯には戦争時代の国の指導者としての大きな責任があります。それを一括して「国のために命を落とした犠牲者」として合祀したのが靖国神社です。戦争犯罪者と戦争犠牲者を一緒にして祀ることによって、区別すべきことを区別しなくなってしまった、その象徴が靖国神社です。

靖国神社の展示施設、「遊就館」を見れば、あの神社が戦争を正当化する歴史観の総本山であることは一目瞭然です。小泉首相が「心ならずも戦争で命を落とした人たちのおかげで今の繁栄がある、二度とあの戦争を起こしてはならない」という思いで参拝している。そのどこがいけないのか」と聞き直りのような発言をしています。これに対しては明確に「あそこは、そういう場所ではない」と言わなければいけない。二度と戦争を起こしてはならないと祈るなら、総理官邸の執務室で祈るべきで、わざわざ靖国神社で不戦を祈るといふのは詭弁ではない。まして日本の戦争で被害を受けた国々の人々が納得するはずがない。本来、靖国神社の参拝の問題は、私たち自身があの戦争をどのように総括するのかという問題なのです。それなのに、中国や韓国と妥協するのが対立するののかという問題にすりかえられてしまっています。これも「草の根ファシスト」が増えてきていることの弊害の一種です。